

【選択】なぜ古典を教えるのか

- ◆期日 令和3年8月16日(月)~8月18日(水)
- ◆主な対象 中学校社会科・高等学校国語科教諭
- ◆定員 80名
- ◆会場 渋谷キャンパス
- ◆応募期間(仮申込) 令和2年4月16日(金)10:00~4月20日(火)23:59
- ◆受講料 2万円
- ◆時間数 18時間 【選択領域】受講者が任意に選択して受講する領域
- ◆講習内容

どうして古文をやるの?—生徒にそう聞かれたらどうお答えになりますか。

当講習では、本学で、日本古典文学、国語学、民俗学、国語教育学等の研究・教育に携わる講師陣が、具体的な資料を紹介しつつ、それぞれの立場から古典の持つ意義について論じます(講座によっては演習形式を取る場合もあります)。そのうえで、受講者の皆さんには、実践家の立場から中学校・高等学校の国語科における古典教育の意義について考えていただきます。

◆担当講師

- | | |
|-------|---------------|
| 土佐 秀里 | 國學院大學文学部教授 |
| 中村 正明 | 國學院大學文学部准教授 |
| 野中 哲照 | 國學院大學文学部教授 |
| 豊島 秀範 | 國學院大學文学部名誉教授 |
| 石川 則夫 | 國學院大學文学部教授 |
| 宮内 克浩 | 國學院大學文学部教授 |
| 小田 勝 | 國學院大學文学部教授 |
| 小川 直之 | 國學院大學文学部教授 |
| 杉山 英昭 | 元國學院大學大学院客員教授 |
| 林 利久 | 國學院大學兼任講師 |
| 高山 実佐 | 國學院大學文学部教授 |

◆シラバス

講義名	万葉集「子等を思ふ歌」を読む
担当講師	土佐 秀里
講義概要	<p>高等学校の一部教科書で教材にも採られている山上憶良の「子等を思ふ歌」を例にして、万葉集の読み方を考える。</p> <p>まず、先入観を排して言葉そのものに向かうこと。この歌の特色は、漢文序と歌がセットになっていることにある。そのどちらが欠けても作品としては完結しない。漢文序と歌とを同等のものとして見る視点が必要である。</p> <p>その漢文序には仏教の知識が反映しているが、その「知識」が本当に正確なものなのかどうか、確認する必要がある。また歌の表現も、先入観で判断せず、用例に即して読解しなければならない。</p> <p>あわせて憶良その人の人生にも触れておきたい。そこからは意外な一面も見えてくることになる。また、万葉集においては、児童を歌の対象にすることは少なく、あったとしても、性愛の対象として見るという反社会的な捉え方であったりするのだが、憶良ひとりだけは、親の視点から「子どもが可愛い」という主題を歌っている。その特異性を踏まえた上で、憶良が児童・幼児を歌う意味について考えてみることにしたい。</p> <p>万葉集が教材として採り上げられる比重は小さいが、日本古典の基礎となる重要な作品であり、それについて理解を深めることは、古典教育・国語教育をより確かなものとしていくためにも必要なことであろう。形式的なものになりがちな和歌単元や古典教育を、いかにして力のある「ことば」の教育にしてゆくかが問われることになる。本講義がその探求の一助となれば幸いである。</p>
評価方法	講義終了後に、課題を提示し、短いレポートを作成する。古典文学作品に対する理解がどの程度あるかという観点と、それを教授する立場であることの自覚という観点から評価する。

講義名	『おくのほそ道』と古典解釈の視点
担当講師	中村 正明
講義概要	<p>松尾芭蕉の紀行文『おくのほそ道』は、現在でも多くの人々に読み継がれている国民文学ともいべき古典であるが、いまなお多くの問題点を抱えている。その多くは本文や発句の解釈に関する問題点であるが、それらはすでに江戸時代からさまざまな解釈が成されてきたものである。更に、近年の『曾良旅日記』と芭蕉自筆本『おくのほそ道』の発見により、また新たな解釈が提示されるようになった。本講義では、そうした近年の新資料発見によって、作品解釈がいかに多様化したかを紹介していく。そして、そこから見えてくる「古典文学作品を解釈するための視点」や「解釈の方法」について、問題提起していくことにする。</p>
評価方法	講義にもとづく筆記試験による

講義名	『平家物語』で身につける想像力
担当講師	野中 哲照
講義概要	<p>「なぜ古典を教えるのか」という問いにたいする答えの一つに、「古典の中に人間の普遍的な姿を学びうるからだ」という言い方があります。時代を超えて生き残った古典には、いつの時代の人々にも訴えかけるものがあるということでしょう。</p> <p>それにしても、物語が伝えようとしている意味を正確に読み解くことができなければ、古典を学ぶ意義も半減してしまいます。「現代語訳はできたのだけれど、作品世界が深く理解できたとは言えない」という状況が、それです。『平家物語』などの軍記物は、現代人が思う以上に、読者の想像力を要求している物語です。われわれは、心してかかれば、その作品世界に入ってゆけないのです。</p> <p>この講義では、『平家物語』などの軍記物で、緻密な豊かな想像力を鍛えます。その力が身に付けば、古典の授業が退屈なものから面白いものへと変身するはずです。</p>
評価方法	講義にもとづく筆記試験による

講義名	『源氏物語』の成立と書承の実態
担当講師	豊島 秀範
講義概要	<p>どうして〔古文〕を学ぶのでしょうか。それは、今の我々が〔小説〕や〔劇画〕などを読むように、〔古文〕は、当時の人々にとって関心の高い、その当時の〔現代の物語〕であったからです。そうした実態について、『源氏物語』を中心に、『紫式部日記』や『狭衣物語』などを取り上げて、以下の順序に沿って一緒に考えてみようと思います。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 『源氏物語』が世に広まる状況 2. 書写することと、物語の改作 3. 和歌を書き加える『狭衣物語』 4. 〔読み聞かせ〕が当時の読書方法 <p>以上について、具体的な資料に即して、考えてみたいと思います。</p>
評価方法	講義にもとづく筆記試験による

講義名	なぜ「舞姫」を読むのか
担当講師	石川 則夫
講義概要	<p>森鷗外「舞姫」は現代文の定番教材として長く採用されてきたが、その文体はほとんど古典教材と言ってもよいほどの難しさがある。これを現代文教材として扱うことに躊躇する教員が多いのも当然ではあろう。したがって、現代語訳のテキストを使用して授業を行っているということも珍しい話ではない。また、「舞姫」のストーリーにしても、エリート官僚への道を突き進んでいた太田豊太郎が、自らの主体的な生き方に目覚め、立身出世の道を外れていくことも意に介さず、薄幸の美少女エリスとのロマンスを謳歌するが、再び官僚への道へ舞い戻ってしまう。つまりは出世のためにエリスを捨てて顧みない男として読まれるために、その節操のない行動は批判的ともなってしまう。つまり、高校生においてはすこぶる評判の悪い男性像を教えなければならないことにもなっている。その内容からも敬遠されがちな教材なのかもしれない。</p> <p>しかし、ではなぜ「舞姫」は日本近代文学史の最初期にいつも言及される作品なのだ</p>

	<p>ろうか。また、確かに文章は古く、明治の古典として位置づけられるところもあるが、この作品を古典として遠ざけてしまってよいのだろうか。</p> <p>この講義では、「舞姫」の新しさを掘り起こし、現代文としてこれを読まねばならない価値について考察してみたい。</p>
評価方法	<p>講義の最後の10分程度の時間で400字ほどのレポートを記述していただきます。テーマは講義の最初にお話しします。また、森鷗外「舞姫」を読んでおいていただきます。文庫版の本文で結構です。</p>

講義名	古文解釈法研究
担当講師	小田 勝
講義概要	<p>古文を文法的に読むとはどういうことか、古文の文法研究はどのように行われるのか、考えます。(1) 非文による考察、(2) 文法テスト、(3) 用例を集める、(4) 現古の違いに気づく、(5) 古文をどう読むか、の内容で、お話しします。</p>
評価方法	講義にもとづく筆記試験による。

講義名	高等学校漢文の教材の研究
担当講師	宮内 克浩
講義概要	<p>教員免許状の取得のためにしっかりと学修したはずの漢文ですが、その知識が知らず知らずのうちに抜け落ちてしまっていることに慌てたといったことはありませんか。本時において、『国語総合』や『古典』の漢文分野の柱をなしている①史伝、②詩、③思想、についての基礎事項を確認し直す契機になればと考えています。</p> <p>①については、交友・交際にまつわる教材、②については、平仄・押韻といった近体詩の決まりや漢和辞典の活用、③については『論語』を中心として、本講習会でのテーマである、なぜ古典ヲ学ブノカといった問題に触れながら進めていく予定です。</p>
評価方法	授業時最後の時間を用いて、授業内容の要約を中心とした筆記の試験を行い、それに基づき評価します。

講義名	「伝承文学」という視点—古典と口承文芸—
担当講師	小川 直之
講義概要	<p>日本の古典文学の中には、さまざまな伝承文化をみることができる。その伝承文化には、儀礼や行事などのほかに、昔話や伝説など、口承文芸とか民話などと呼ばれている口誦の物語がある。こうした古典の中に表出している、あるいは埋め込まれている伝承文化を見ていくと、日本文化がもつ持続性とか、変化・変容などを知ることができる。</p>

	<p>令和3年度の講習では古典の中の口承の物語に焦点をあて、「伝承文学」という視点を明確にする。具体的には「古事記」にある三輪山伝説、「平家物語」巻第八「緒環」と、昔話として伝承されている「蛇髻入」を取り上げ、口誦の物語が歴史過程で文字化されている姿を講じていく。「古事記」の三輪山伝説や「平家物語」の「緒環」は、いずれも始祖伝説といえる物語で、人物の特異性を語るときに異類婚姻譚が使われているのである。こうした異類の子孫の描き方と、老人が子どもたちにイロリ端などで語って聴かせた「昔話」としての蛇髻入の物語とを比較することによって、文字テキスト化された物語と口承の物語がどのように違うのかなどを捉えていく。</p> <p>口承の物語を素材にした文学は、近代文学の中にも多くみられるし、中学生や高校生の多くが、子どもの頃に親しんだ絵本にも口承の物語が取り込まれている。こうした視点を授業などに取り込むことによって、国語教育に広がりを与えることができよう。</p>
評価方法	小レポートの点数による。

講義名	学習材としての開発教材への構想
担当講師	杉山 英昭
講義概要	<p>古来から、「かぐや姫の物語」とか「竹取物語」とか呼称された初期物語から、現在の我が国の古典文学の学習は開始され親しまれている。仏典や漢籍などの古代説話や、内外の諸伝承にもその淵源を見るこの物語は、そのスケールの大きさから古典文学学習の驍頭を飾るにふさわしい教材だと評することができる。「竹取物語」の教材化の歴史は古いが、現代においてはどのような文学作品が学習材としてふさわしいかという問題は、古典文学研究の進展と現代という時代への認識とによって考究されなくてはならない。ここでは古典文学の教材化の視点から、古筆を含めた教材原本文や古典や近代の絵画資料など、教材のビジュアル化の問題をも含めて、新学習指導要領改訂を視野に入れて、学習材としての古典文学教材を構想してみたい。</p>
評価方法	小論文叙述による評価。二つの問題のうち、一問題を選んで論述する。

講義名	古典籍を用いた教材作成と 「学びへの誘い」
担当講師	林 利久
講義概要	<p>古典文学を学ぶには、原文を読む力が重要です。しかし、古典文学の中で描き出される日本の文化は、現代の社会とは余りにもかけ離れていて、学ぶ者には大きな違和感を与えているのではないのでしょうか。そのことは、鈴木健一氏の『古典注釈入門：歴史と技法』（岩波書店、2014年10月刊）などを読んでみても、中世や近世でも同じであり、古典を学ぶ苦勞を押し量ることができます。</p> <p>そこで、百瀬今朝雄・百瀬美津著『勸学院の雀：故事古典初まなび』（岩波書店、2002年12月刊）所収の「詠め」（p43-52）を基盤にして、違和感を少しでも共感できるものへと誘うために、補助的資料として絵画などを用いて古典文学の世界を読み取る方法を展開します。</p>

	<p>ビジュアル資料を用いて、古典文学を考えることは様々なところで語られています。日常の中からほんの小さな事実の発見や興味を得て、「調べて見る機会」や「気づき」を与えることができると思います。 國學院大學図書館所蔵の古典籍資料のデジタルライブラリーなどを参考に、『月々のあそび』、『竹取物語絵巻』（3種）、『伊勢物語絵巻』、『伊勢物語（奈良絵本）』、『義経奥州落絵詞（絵巻）』、『酒吞童子絵巻』 などを用いて古典文学や日本の文化に通ずる、授業に活用出来る資料作成を考えてみます。 古典資料と現代の活字資料や映像資料を融合することで、生徒達に古典文学や日本の文化についての新たな興味を引き出す機会と方法のヒントになればと思っています。 また、We b上で散見できるサイトなどの利用方法を提示し、授業への活用を紹介致します。</p>
評価方法	